新美南吉「ごんぎつね」の道

写真は朝日新聞 1 月 19 日朝刊「みちのものがたり」。10 年ほど前、半田と新実南吉記念館を訪ねたことがある。なんとも言えない味わいと郷愁を感じた。

まっすぐな道を人が行き交う。知多半島のほぼ中央にあって海運や酢、酒造りで栄えた半田の市街へ向かう通称大道。その道は夭逝の童話作家、新美南吉（1913〜43）が生まれ育った畳屋の近くから南東に延びていた。生家に塀や生垣はなく、屋内からでも道はよく見渡せた。幼い頃は遊び場にもなったという。

旧制半田中学校（現・県立半田高校）に通っていたころ、文学に目覚め創作を始めた。代表作「ごんぎつね」は 18 歳のときの作品だ。児童雑誌『赤い鳥』に投稿し、32 年 1 月号に「ごん狐」として載った。子ギツネのごんはいたずらを後悔し、母を亡くして独りになった男、兵十に栗やマツタケを届ける。だが、それを知らない兵十に火縄銃で撃たれてしまう―。童話では珍しく、主人公の死という結末を迎える。他者とのふれあいを求めても、すれ違うせつなさ。幼少期に痛いほど感じた孤独。南吉はしかし、不条理な物語で悲しみの先に心が通い合う希望も描いた。

「ごんぎつね」など南吉の作品が広く知られるようになったのは、死後のことだ。美智子皇后が 98 年、国際児童図書評議会（IBBY）世界大会に寄せたビデオ講演で、童話「でんでんむしのかなしみ」に触れたことも、国内外に改めて南吉を知らせるきっかけになった。

でんでんむしが、背中の殻に悲しみが詰まっていることに気づく。悲しくなって友だちに相談すると、みな自分の殻にも悲しみが詰まっていると答える。悲しみは誰でも持っているのだと気づき、嘆くのをやめた―という物語だ。亡くなる 8 カ月前の 42 年 7 月 10 日付日記に、南吉はこう書き残した。

「よのつねの喜びかなしみのかなたに、ひとしれぬ美しいもののあるを知っているかなしみ。そのかなしみを生涯うたいつづけた」

写真下は矢勝川の堤防に咲く彼岸花。「ごんぎつね」で南吉が「赤い布のよう」と書き、その情景を再現しようと、地元の人たちが植えてきた。彼岸花の咲く秋に行ってみたかった。

（2019 年 1 月 24 日）